巻頭特集

このまちの暮らしが、もっと好きになる！

転勤族カフェ

知人もいなくて全てがゼロからのスタート、地域に馴染めるか、慣れない土地での生活に大きな不安を持つ“転勤族”。そんな転勤族ならではの悩みを語り合い、地域での仲間作りや情報の交換を目的に開かれている「転勤族カフェ」を訪ねた。

転勤族は誰でも参加OK！共通の話題でフリートークを

去る1月22日、木枯らしが吹く寒い日だったが、『豊中市千里文化センター「コラボ」（以下、コラボ）』の一室に、「おはようございます」と、ベビーカーを押したママたちが続々と入ってきた。皆、「転勤族カフェ」の参加者だ。リピーターもいれば、初参加の顔も多い。思い思いの場所に腰をおろし、子どもたちも自由に動きだす。

「転勤族カフェ」は、『豊中市千里地域連携センター』のサポートのもと、市民が参画する『千里文化センター市民実行委員会』が主催している。もともと、『とよなか男女共同参画推進センター「すてっぷ」』ではじまり、「千里は転勤族が多いので、そちらでも開催してほしい」との市民からの要望を受け、4年前に『コラボ』での開催が実現した。普段は月に1回開催されており、転勤族なら年齢・性別を問わず、予約不要で自由に“誰でも”参加できる。が、この日は少し違った。というのも、『コラボ』の「転勤族カフェ」は未就園児を持つ女性の参加が多く、子育てに関する悩みがよく話題に上っていた。そこで今回、「ベビーとママのための転勤族カフェ」と題し、“赤ちゃん連れ”の転勤族に初めて限定して、イベントを開くことになったのだという。

開始時間が来たところで「どこから越してきたか、今の住所など簡単な自己紹介からお願いします」と、本日のまとめ役、桑田さん司会のもとスタート。北は北海道、南は九州、沖縄から、今回はアメリカから千里に越してきた方もいた。

転勤族カフェ ボランティアスタッフのみなさん

▼転勤経験者でもある斉藤さんと平岩さんは、新しく越してきた人の良き理解者であり、頼れる存在だ

▲普段の「転勤族カフェ」は机を囲んでのフリートーク。転勤してきた人なら年齢性別問わず、誰でも何度でも参加できる

心強い先輩転勤族、そして同じ環境にいる“新しい友人”

転勤族は共通の話題や悩みがあるようで、出身地や転勤回数、転勤先での珍事件など、“転勤族あるある話”で大いに盛り上がる。特有の悩みは多岐にわたり、そもそも地理が分からない、相談相手もいない、方言が分からない、情報は広報やチラシを隅々まで読んで収集……。そんな中「転勤族カフェ」には千里に越してきて何年か経つ転勤族の先輩がいる。店や病院、学校など、“知りたい情報”を“信頼できる情報”として聞くことができるのだ。参加者の多くは、はじめは馴染めるかどうか不安を抱えて来るそうだが、実際のアンケートでは「おしゃべりするだけで楽しかった」、「情報交換できてよかった」など、「また来たい」の声が多く寄せられる。転勤族にとってここは地域に触れる第一歩の地でもあり、ネットワーク作りの起点となっているようだ。

豊中市千里文化センター「コラボ」
市民協働部　千里地域連携センターのみなさん

転勤で千里に越してきて、現在は市民サポーターとして活動する斉藤さんと平岩さん。千里の特徴を尋ねると「転勤族が多い」と一番に答えた。子どもの学校も、クラスの半数以上が転校経験者。先生も転入・転校に慣れていて安心なのだとか。新興住宅地として発展してきた由縁か、ここ千里は全国の中でも、とりわけ多くの転勤族が集まる地域なのだ。

千里での経験が励みに新天地でも繋がり続ける輪

友達もできて、生活にも慣れてきたのにまた転勤……。ひとつの地になかなか落ち着けないのが転勤族の性。2、3年でまた転勤していく人も少なくない。けれど「ここで培った関係があるから大丈夫」と、「転勤族カフェ」での経験が新天地へ向けての励みになったり、「次の場所でも『転勤族カフェ』を提案してみよう」と、自立のきっかけにもなっているそうだ。また様々な土地の経験者がいることから、次の転勤が決まっても、事前にそこの情報を聞くこともできる。

「転勤しても連絡を取り合ったり、友達の転勤先と自分の実家が近いので、帰省した時は会う約束をしたり、ここでできた友達とはずっと続いています」と平岩さん。「転勤族カフェ」で築いた繋がりは、千里を越えても切れることなく、転勤族の支えになっているのだ。

豊中市千里文化センター「コラボ」
転勤族カフェ

※次回の開催は2月26日（金）・3月11日（金）の予定。その他、今後の開催については問合せを
住所：豊中市新千里東町1-2-2
TEL：06-6831-4133

文／臼井 葉月　デザイン／小林 亜由　写真／Ayami